

— 次の記事を読んで問いに答えよ。

人間の社会と精神の「落下」には、物体のそれに伴うような抵抗はないのだろうか。少なくとも落下する物体には空気抵抗がある。それが帯びる摩擦はその物の存在を浮き彫りにし、その特性を露わにするだろう。それは少なくとも落下運動の公式に修正をもたらすだけの物性をしるしづける。このような落体としての自己意識を、人間の社会と精神はいかにして手に入ればよいのだろうか。というのも、私たちが入りこんでしまったこの世界の状態は、落下則の支配する運動によって貫かれているのではないか、という思いに捉えられるからである。そこには物体におけるごとき「抵抗」がないようにみえる。あるいは極めて稀薄にみえる。そうでなければ、私たちの社会は落体としての摩擦の呻きをあげてしかるべきではないか。

この落下状態には「恐怖」感が伴わないということなのだ。いや、むしろ事態は逆なのだろう。この状態に身を委ねることが恐怖からの保護をもたらすだろう。少なくともそう信じられている。ここでは落下軌道からの逸脱や混線こそが恐怖なのであり、そこに生じるはずの抵抗や摩擦は周到にあるいはほとんど自動的に排除されねばならないのだ。こういう存在形態に塗りこめられた私たちを覚醒させうる事態として、かつて「経済恐慌と事故の恐怖」が注目されたことがあった。確かに自動運行のごとく営まれる社会生活の軌道上においては、覚醒への意識的努力のみを当てにするわけにはいかない。しかし、いまやそれらも刻々と「イメージ」の世界に送りこまれ組みいれられて、恐怖が担う衝撃力と覚醒力とを持たなくなりつつあるのではないか。「恐怖」はたとえばコンピューターの過剰反応と数字の自己ゾウシヨクとして出現し、「事故」は幾重にもイメージの被膜によって遮蔽され、あるいは各種の「保険」によって保護されてほとんど記号的物件として立ち現われてしまう。いずれも当事者を当事者として成立させないのである。

このようなイメージ世界の支配が強まれば強まるほど、それに当事者たる身柄を「質入れ」するという倒錯と、その世界のさらなる強化肥大という悪循環を生みつづけるだろう。そこでは恐怖に対する感受力はいよいよスライジャクし、そこに登場する恐怖の社会的イコンはむしろ想像力を縮小し停止させるものとして作用する。つまり全員が安んじて喋々々々できる「恐怖」像として迎

え入れられるのである。イメージ世界がこのように「リアリティ」を僭称せんしょうするとすれば、私たちに必要な精神的作業は、そのようなりアリティを装わないものへと向かうことにあるだろう。

おちながらわれわれは庭をつくり

おちながら子供をそだて

おちながら古典をよみ

おちながら形容詞を消し

(ルジエーヴィツチ「おちる」)

このポーランドの詩人が書きつけた一節は、私たちの現実そのものではないか。それがリアリティの稀薄なものとして現われるとすれば、それこそ私たちの「現実」が全面かつ微細にわたって「おちながら」に繋留けいりゅうされているためではないか。あるいは、それにもかかわらず「おちながら」を隠蔽いんぺいしているためではないか。そうであるなら、ここには一つの転倒が生じうる。すなわち、私たちの内にこの落下状態を「上昇」のそれと取り違えるということがあるのではないか。それがイメージへの自発的な質入れのいわば代価である。私たちは落ちながら、庭を作ったり子供を育てたりすることに生活の「上昇」を思い、古典を讀んだり(イ)形容詞を消したりすることに「向上」を考えているのではなからうか。そのすべてが、落ちながらなされているのではないか。そこには、位置の移動や変化も起こり、まさしく運動が行われてはいるけれども、存在の方向がすべて反対なのである。逆さまなのである。この倒立した世界のなかでは、上昇や向上のための努力が落下の加速化をもたらすという事態すら生じるだろう。上昇として表われる失墜あるいは墮落。私たちがまず抜きとるべく努めなければならぬのは、この虚偽意識(ウ)ではなからうか。

かつて百年前の哲学者は、「いま始まろうとしている崩壊・破壊・没落・顛覆てんぷくのこの長期に及ぶ豊富な連続の予感を書きつけた。それは、かれが登場させた狂人の「おれたちは無限の虚無のなかを迷っていくのではないか？ むなししい虚空がわれわれに息を吹きかけているのではないか？」という独白の世界へ、かれ自身が突き進んでいくという代償のもとに摑つかみとられた事態で

あった。自分をとりまく虚無にみちた落下世界を「豊富な連続」へと変換しようとする力技であった。これに対して現代の私たちは、世界の崩落と終末の漠然たる予感や懸念を、格別のコストを支払うこともなく手にしているようにみえる。その無方向で曖昧な転倒は、私たちにおけるこの漠然さに見合ったものである。したがって哲学者がそこから出立し全身を曝した「無限の虚無」が、ここには決定的に欠けている。「無限」は追放または失念され、「虚無」は変形され或いは梱包されている。それをカイヒすべく、私たちの社会と精神の機構は編制されているのである。

私たちの「世界像」は、百年前の哲学者のそれと異なるだけではない。四十数年前の「生きよ墮ちよ」の呼びかけとも違っている。その呼びかけが含んでいた明るさも、それを貫いていた「墮ちる道を墮ちきること」によつて、自分自身を発見し、救わなければならぬ」という決意にみちた信念をもそれは欠いている。つまり素寒貧すかんびんの確信を欠いているのである。ここでも私たちの事態は逆さまである。現在の社会と精神を貫通している落下運動は、まさに私たちが素寒貧とは正反対の状態にある故に作動しているであり、その状態からたえず運動エネルギーを充填じゅうてんされているものなのである。この「運動」は、焼け野原や屋根裏部屋のような零地点から出発するものではなく、「上と下」が不鮮明な成り上がった状態に棲みついているのである。そうであるとすれば、この落下運動は自分自身の発見ではなく喪失を導出し、その救済ではなく崩壊を加速するものとなるだろう。いや、この落下軌道の上では「自分自身」はもはや問題にならないのだ。人間たちをその基礎に到達させる「落下」ではありえないのである。

したがって、この落下運動は「没落」とは自覚されない。<sup>(4)</sup> マギれもなく没落しつつあるにもかかわらず、それとして捉えられないとき、おそらくそれは最低限の墮落となるだろう。没落の時代が、既存の制度化された価値体系の表皮を剥ぎとり、それぞれの事物が含有する意味を溢れ出させ、物事を諸要素に分解して新たな配列を促すことによつて、崩壊を通じて豊かな意味世界を産出しうることを、私たちは歴史の経験から学び知っている。古今のケツサク(5)のいくつかを思い浮かべてみるだけで充分だろう。没落が含むそのような解体や剝離はくりや分解の諸要素に注意深くあること、つまり没落がそれとして深く生きぬかれるとき、「破れつつある一時代の富は大きい」(E・ブロッホ)と言うことができるだろう。<sup>(E)</sup> 私たちの現在の「落下」状態はそうはなっていない

い。零落を零落たらしめず、分解が分解たりえず、時代の「破れ」がたえず先送りされるとき、没落期の富は隠蔽されたまま相続されることができないのである。

(市村弘正『小さなものの諸形態』による)

(注) ○イコン——象徴、象徴的な事柄。

○ルジェーヴィッチ——ポーランドの劇作家・詩人(一九二一—)。

○百年前——ここでは、十九世紀末を指す。

○四十数年前——ここでは、第二次大戦直後を指す。

○E・ブロッホ——ドイツの哲学者(一八八五—一九七七)。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)(3)(4)(5)の片仮名を適切な漢字に書き改めよ。

問(二) 傍線の箇所ア)「こういう存在形態」とはどのような状態か。四十字以内で説明せよ。

問(三) 傍線の箇所イ)に「形容詞を消したりすること」とあるが、「形容詞を消す」とはどのようなことか。三十五字以内で説明せよ。

問(四) 傍線の箇所ウ)「この虚偽意識」とはどのような「意識」か。四十字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所エ)「私たちの現在の『落下』状態はそうはなっていない」とはどのようなことを言っているのか。「現在の状態と「そう」が示す内容を対比させながら、本文全体の趣旨をふまえて八十字以内で説明せよ。

— 二 — 次の文章は、小川洋子「キリコさんの失敗」の一節である。キリコさんは「私の家の「お手伝いさん」であり、その容姿が、「目鼻立ちのはつきりした、肉付きのいい人だった。アイシャドーは水色で、唇には当時流行のグロス入りの口紅が、はみ出すほどたつぷり塗られていた。なのに髪の毛には構わず、無造作に輪ゴムで縛ったり、あちこちヘアピンで留めたりしていた。」と描写される人物である。読んで問いに答えよ。

十一歳の夏休み、仕事で一カ月ヨーロッパを回っていた父親から、お土産に万年筆をもらった。銀色で細身の、スイス製の万年筆だった。

キャップを取ると、磨き込まれた流線型のペン先が現われ、それは見ているだけでも胸が高鳴るほど美しく、持ち手の裏側にはその曲線によく似合う筆記体で、私のイニシャルYHが彫ってあった。

おもちゃ以外のお土産をもらうのは生まれて初めてだったし、まわりで万年筆を使っている子など一人もいなかったから、自分が一足飛びに大人になったような気がした。この万年筆さえ手にしていれば、何か特別な力を発揮できると信じた。

私はいつどんな時も、書きたくて書きたくてたまらなくなった。国語の漢字練習帳があるからと母に嘘をつき、お金をもらって大学ノートを買った。学校から帰るとランドセルを置き、真つすぐ机の前に向かってとにかく万年筆のキャップを外した。

いざとなつて、自分が何を書くつもりなのか、ちつとも考えていないことに気づいたが、私はひるまなかつた。そんなことは大した問題とは思えなかつた。インクがしみ出してくる瞬間や、紙とペン先がこすれ合う音や、罫線の間を埋めてゆく文字の連なりの方が、ずっと大事なのだった。

大人たちはすぐに、娘が何やら夢中になつて書いていると気づいたが、必要以上に干渉はしなかつた。とにかく机の前で書き物をしているのだから、それは勉強、例えば漢字の書き取りのようなものに違いないと思ひ込んだらしい。

スリッパをはいて階段を登つてはいけなかつたか、お風呂に入った後は冷たいものを飲んではいけなかつたか、あの頃課せられていた多くの禁止事項の中に書き物が加えられなかつた代わりに、大人たちは誰も書かれた内容については興味を示さなかつた。

た。どうせ自分たちの知っている漢字ばかりなんだから、という訳だ。

私はまず手始めに、自分の好きな本の一節を書き写してみた。『ファーブル昆虫記』のフンコロガシの章。『太陽の戦士』の出だしのところ。『アンデルセン童話集』から『ヒナギク』と『赤いくつ』。アン・シャーリーが朗読する詩。『恐竜図鑑』のプテラノドンの項。『世界のお菓子』、トライフルとマカロンの作り方。……

想像したよりずっとわくわくする作業だった。たとえ自分が考えた言葉ではないにしても、それらが私の指先を擦り抜けて目の前に現われた途端、いとおいしい気持ちに満たされた。

言葉たちはみんな私の味方だ。あやふやなもの、じれったいもの、臆病おびょうなもの、何でもすべて形に変えてくれる。ブルーブックのインクで縁取られた、言葉という形に。

そしてふと気がついて手を休めると、ノート一面びっしり文字で埋めつくされている。ついさつきまでただの白い紙だったページに、意味が与えられている。しかもそれを授けたのは自分自身なのだ。

私は疲労感と優越感の両方に浸りながらページを撫なで付けた。まるで世界の隠された法則を、手に入れたかのような気分だった。

『書き物』に対する態度が、他の大人と唯一違っていたのがキリコさんだった。干渉しない点については同じだが、彼女は明らかにこの作業を、勉強とは違う種類のものとして認めていた。敬意さえ払っていたと言ってもいい。

子供部屋やダイニングテーブルで作業に熱中している私を見つけると、一瞬キリコさんは立ち止まり、姿勢をただし、邪魔しないように注意を払いながら通り過ぎた。あるいはおやつを運んでくる時は、不用意にノートの中身に目をやって盗み見していると誤解されないよう、気を使っているのが分かった。自分の手元に視線を落とす、一切声は掛けず、ノートからできるだけ遠いところにジュースを置いた。コップに付いた水滴で、ページが濡ぬれてはいけな**い**と思**っ**たからだろう。

やがて私は他人の文章を書き写すだけでは満足できなくなり、作文とも日記ともお話ともつかないものを書き付けるようになった。クラスメイト全員の人物評と先生の悪口、一週間の食事メニュー、百万円あったら買いたい品物のリスト、テレビ漫画

の予想ストーリー、自分の生い立ち・みなしご編、無人島への架空の旅行記。とにかく、ありとあらゆるものだった。今日は何にも書くことがないという日は、一日もなかった。キャップさえ外せば、万年筆はいつでも忠実に働いた。だから初めてインクが切れた時は、うろたえた。

「どうしよう、万年筆が壊れちゃった」

私は叫び声を上げた。

「もう壊しちゃったの？ せっかくのパパのお土産なのに。新しいのは買いませんからね。壊したあなたが悪いんです」

新しいのは買いませんからね——これが母の口癖であり、得意の台詞せりふだった。私は自分の不注意を呪のろい、絶望して泣いた。

「大丈夫。インクが切れただけだから、補充すれば元通りよ」

<sup>(ウ)</sup> 救ってくれたのは、やはりキリコさんだった。

「スイスのインクなのよ。パパがまたスイスへ行くまで待たなきゃならないの？」

「いいえ。街の文房具屋さんへ行けば、必ず売っています」

必ずという言葉を強調するように、キリコさんは大きくうなずいた。

キリコさんは正しかった。私は万年筆を壊してなどいなかった。約束どおり彼女は新しいインクを買ってきて、補充してくれた。ケースの裏に書いてある説明書は外国語だったから、二人とも読めなかったけれど、彼女は慎重に方向を見定め、崇高な儀式の仕上げをするように、万年筆の奥にインクを押し込めた。

「ほらね」

それがよみがえったのを確かめると、キリコさんは得意そうに唇をなめた。<sup>(エ)</sup> 一層唇が光って見えた。

「絶対ママには内緒にしておいてね」

誘ったのはキリコさんの方なのに、何度となく私は念を押した。

「平気よ」

本当にキリコさんは平気な顔をしていた。私たちは歯医者者の帰り、寄り道して一緒にチョコレートパフェを食べていた。高級なフランス料理であれ、屋台の焼きそばであれ、母は子供が家の外で食べ物を口にするのは、衛生上好ましくないと信じていた。

「ここのはね、フルーツが新鮮で美味しいの」

彼女は大きな桃を飲み込んだ。

口の中にはまだ石膏と消毒液の匂いが残っていて、それがチョコレートと混じり合い奇妙な味がした。詰め物をしたばかりの奥歯は、ものを噛むたびカクカク音がした。

立派なパフェだった。フリル型に広がったガラス容器からあふれるほどに、ウエハースやバナナや生クリームが盛り付けてあった。キリコさんは長いスプーンを真ん中に突き刺し、せつかくのデコレーションが崩れるのも構わず、底のチョコレートを手くいで上げて食べた。

「痛かった？」

彼女は尋ねた。

「そつでもない」

私は首を横に振った。

「よく歯医者になんか行く勇氣があるわね。まだほんの子供なのに」

「歯は大切なものよ。だって永久歯が抜けたら、二度と生えてこないんだもの。誰だって指を切断されたら悲しむでしょ？もう元に戻らないからよ。歯だつて一緒。一度抜けたらおしまい。なのにみんな、指ほどには大事にしないの」

ふうん、とうなずきながら、キリコさんはスプーンの背でバナナをつぶした。

「でもやつぱりごめんだわ。口の中に手を突っ込まれて、べろの裏から喉の奥までのぞかれたうえに、ドリルで穴を開けられるのよ。考えただけでそつとする」



口元からチョコレートが垂れそうになり、あわててキリコさんはナプキンで拭<sup>ぬぐ</sup>った。せつかくの口紅がとれてしまうのではないかと、私は心配した。しかしそれはまだ艶<sup>つや</sup>やかさを失っていないかった。チョコレートよりもずっとべたべたして、甘そうだった。

「ねえ……」

私は前から気になっていた話題を、思い切って持ち出してみた。

「口紅を塗るって、どんな感じ？」

ああ、そんな簡単なこと、というふうには彼女はナプキンを丸めて転がし、バッグから口紅を取り出した。

「塗ってみれば分かるわ」

私はそれをくるくる回し、先を出したり引つ込めたりした。もうずいぶんすり減っていた。

「さあ、こうするの」

キリコさんは身を乗り出し、あつという間に私の唇を真っ赤にした。

「うん、なかなかよ」

私は喫茶店の窓ガラスに映った自分の顔を眺めた。キリコさんほど素敵ではなかった。歯の治療に失敗して、たちの悪いバイキンに感染したみたいに、口だけが腫<sup>は</sup>れ上がって見えた。そのうえ、なめてみてもチョコレートのように甘くはなかった。さつき歯茎に打たれた、麻酔薬の味に似ていた。

「大変。ママに知れたらとんでもないことになる」

あわてて私はナプキンでこすった。なのにこすればこするほどはみ出して、余計目立ってしまった。

「もう取っちゃうの。せつかく塗ったのに」

フツと微笑<sup>ほほえ</sup>んでキリコさんはナプキンにコップの水を垂らし、一緒にこすってくれた。セーターの襟ぐりから、温かそうな乳房がのぞいていた。

夜、治療したばかりの歯がうずいてなかなか眠れなかった。パフェのせいかもしれないと、私は不安でしかたなかった。そのうえ唇までがひりひりと痛みだした。

<sup>(オ)</sup> 私はベッドからはい出し、キリコさんとの秘密を全部、ノートに書いた。

(小川洋子「キリコさんの失敗」による)

問(一) 傍線の箇所(ア)に「そんなことは大した問題とは思えなかった」とあるが、なぜ「私」はそのように感じたのか。三十字以内で記せ。

問(二) 傍線の箇所(イ)に「まるで世界の隠された法則を、手に入れたかのような気分だった」とあるが、なぜ「私」はそのような気分になったのか。四十字以内で記せ。

問(三) 傍線の箇所(ウ)に「救ってくれたのは、やはりキリコさんだった」とあるが、「私」が「やはりキリコさんだった」と思った理由を、本文の内容に即して四十字以内で記せ。

問(四) 傍線の箇所(エ)に「一層唇が光って見えた」とあるが、なぜ「私」にはそのように「見えた」のか。その理由を本文の内容に即して五十字以内で記せ。

問(五) 傍線の箇所(オ)に「私はベッドからはい出し、キリコさんとの秘密を全部、ノートに書いた」とあるが、「私」はなぜそのようなことをしたのか。その理由を本文全体の内容をふまえて八十字以内で記せ。

## 三

次の文章は『かざしの姫君』の一節である。源中納言の娘であるかざしの姫君は、菊の花を愛し、菊の植えてある庭をながめて暮らしていた。その姫君のもとに美しい貴公子が現れ、しのび通うようになって何日か過ぎた。読んで問いに答えよ。

ある時姫君仰せけるは、「今は何をかつつみ給<sup>たま</sup>ふらん。はやはや御名を知らさせ給へかし」と聞え給へば、この人恥づかしげにて、「このあたりに少将と申し侍<sup>はべ</sup>るものなり。後にはさだめてしろしめすべし」とて、<sup>(1)</sup> 帰り給ひぬ。

その頃、<sup>みむと</sup> 帝には、<sup>はなぞろ</sup> 花揃へありとて、人びとを召されければ、中納言殿も参り給ふ。帝、中納言をちかづけ給ひ、「世の常ならぬ菊の花揃へ奉れ」と<sup>りんげん</sup> 綸言あらせ給へば、力なくして、中納言菊を奉らんとて、帰られけり。

さて少将はその日の暮方に、西の対に來りて、いつよりもうちしをれたる有様にて、世の中の<sup>(2)</sup> あだなることども語り続けて、うち涙ぐみ給へば、かざしの姫君、何とやらん物思ひ姿に見えさせ給へば、「いかなることをおぼしめしわづらひ候ふぞ。心を残さず語り給へかし」と、夜もすがら聞えさせ給へば、「今は何をかつつみ候ふべき。見え参らせんことも、今日を限りとなりぬれば、いかならん末の世までと思ひしことも、皆いたづらごととなりなんことの悲しさよ」とて、さめざめと泣き給へば、姫君は「こはいかなることぞや。<sup>(3)</sup> 御身をこそ深く頼み奉りしに、自らをば何となれとて、さやうには聞えさせ給ふらん。野の末、山の奥までもいざなひ給へかし」とて、声も惜しまず悲しみければ、少将も心に任せざればとて、とかくの言の葉もなし。

ややありて少将、涙のひまよりも、<sup>(1)</sup> 「今ははや立ち帰りなん。あひかまへておぼしめし忘れ給ふな。自らも、御心ざしいつの世に忘れ奉るべき」など言ひて、<sup>びん</sup> 鬢の髪を切りて、下絵したる薄様におし包みて、「もしおぼしめし出でん時は、これを御覽させ給へ」とて、姫君に参らせて、また「胎内にもみどり子を残し置けば、いかにもいかにもよきに育ておきて、忘れ形見ともおぼしめせ」とて、泣く泣く出で給へば、姫君も御簾<sup>みす</sup>のほりまで忍び出でて見やり給へば、庭の籬<sup>まがき</sup>のあたりへたたずみ給ふかと思ひて、見え給はず。

かくてその夜も明けぬれば、中納言は菊を君へぞ奉らせ給ひける。君<sup>えいらん</sup> 覧限りなし。

姫君は夕暮を待ち給へども、少将は夢にもさらに見えざれば、<sup>(3)</sup> いたはしや姫君は、<sup>こすゑ</sup> 梢のほかなる月影は、<sup>くま</sup> 隈なき夜半<sup>よ</sup>の空な

れど、涙に曇る心地して、長き夜な夜な明かし給ひて、ある時その人の言ひ置きし忘れ形見を取り出だし、思ひの余りに見給へば、一首の歌あり。

にほひをば君が袂に残し置きてあだにうつろふ菊の花かな

とありて、その黒髪と思ひしは、しほめる菊の花なれば、いよいよ不思議におぼしめし、さては詠み置く言の葉までも、菊の精かとおぼえて、その白菊の花園に立ち出で給ひて、のたまふやうは、<sup>(工)</sup>「花こそちらめ、根さへ枯れめやと詠ぜしも、今身の上に知られたり。たとひ菊の精なりとも、今一度言の葉をかはさせ給へ」とて、あるにあらぬ御有様、げに理とぞ知られける。

(『かざしの姫君』による)

(注) ○綸言——天子のおことば。 ○薄様——上質で薄い淡黄色の紙。

○籬——竹・柴などを粗く編んでつくった垣根。 ○叡覧——天子が御覧になること。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)(3)の語句の意味を記せ。

問(二) 傍線の箇所(ア)「御身をこそ深く頼み奉りしに、自らをば何となれとて、さやうには聞えさせ給ふらん」を口語訳せよ。

問(三) 傍線の箇所(イ)「今ははや立ち帰りなん。あひかまへてあひかまへておぼしめし忘れ給ふな」を口語訳せよ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「少将は夢にもさらに見えざれば」とあるが、それはなぜか。その理由を三十字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所(エ)に「花こそちらめ、根さへ枯れめやと詠ぜしも、今身の上に知られたり」とあるが、ここには姫君のどのような心情が込められているか。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

四

次の文章は、明末の文人鍾惺が、友人の譚元春とともに編んだ詩の選集『詩歸』に付した自序の前半部分である。読んで問いに答えよ。なお、設問の都合上、一部訓点を省いたところがある。

選<sub>ビ</sub>古人<sub>ノ</sub>詩<sub>ヲ</sub>而命<sub>ナツケテ</sub>曰<sub>フ</sub>詩歸<sub>ト</sub>。非<sub>ズ</sub>謂<sub>フニ</sub>古人<sub>ノ</sub>之<sub>シ</sub>詩<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>吾<sub>ノ</sub>所<sub>レ</sub>選<sub>ビ</sub>為<sub>ス</sub>歸<sub>ト</sub>。庶<sub>下</sub>幾<sub>見</sub>

吾<sub>ノ</sub>所<sub>レ</sub>選<sub>ビ</sub>者<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>古人<sub>ノ</sub>為<sub>ス</sub>歸<sub>ト</sub>也。引<sub>キテ</sub>古人<sub>ノ</sub>之<sub>シ</sub>精神<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>接<sub>シ</sub>後<sub>人</sub>之<sub>シ</sub>心目<sub>ニ</sub>使<sub>ム</sub>其<sub>ノ</sub>

心目<sub>ヲ</sub>有<sub>ラ</sub>所<sub>レ</sub>止<sub>マル</sub>焉<sub>。</sub>如<sub>シ</sub>是<sub>而</sub>已<sub>矣</sub>。昭明選<sub>ビ</sub>古詩<sub>ヲ</sub>人遂<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>其<sub>ノ</sub>所<sub>レ</sub>選<sub>ビ</sub>者<sub>ヲ</sub>為<sub>ス</sub>

古詩<sub>ト</sub>。因<sub>リテ</sub>而名<sub>ツケテ</sub>古詩<sub>ニ</sub>為<sub>シ</sub>選<sub>ト</sub>。唐<sub>人</sub>之<sub>シ</sub>古詩<sub>ヲ</sub>曰<sub>フ</sub>唐選<sub>ト</sub>。嗚呼<sub>、</sub>非<sub>レ</sub>惟<sub>レ</sub>古

詩<sub>亡</sub>、幾<sub>下</sub>併<sub>ニ</sub>古詩<sub>之</sub>名<sub>ニ</sub>而亡<sub>之</sub>矣<sub>。</sub>何<sub>者</sub>、人歸<sub>レ</sub>之<sub>也</sub>。選<sub>者</sub>之<sub>シ</sub>權

力<sub>、</sub>能<sub>ク</sub>使<sub>メ</sub>人<sub>ヲ</sub>歸<sub>セ</sub>、又<sub>能</sub>使<sub>メ</sub>古詩<sub>之</sub>名<sub>ヲ</sub>与<sub>レ</sub>実<sub>俱</sub>。狗<sub>レ</sub>之<sub>也</sub>。吾<sub>其</sub>敢<sub>易</sub>言<sub>選</sub>

哉<sub>。</sub>嘗<sub>一</sub>試<sub>論</sub>之<sub>。</sub>詩<sub>文</sub>氣<sub>運</sub>、不<sub>レ</sub>能<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>代<sub>趨</sub>而<sub>下</sub>、而<sub>作</sub>詩<sub>者</sub>之<sub>シ</sub>意<sub>興</sub>、

慮<sub>無</sub>不<sub>レ</sub>代<sub>求</sub>其<sub>高</sub>。高<sub>者</sub>、取<sub>ニ</sub>異<sub>於</sub>途<sub>徑</sub>耳<sub>。</sub>夫<sub>途</sub>徑<sub>者</sub>、不<sub>レ</sub>能<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>異

者<sub>也</sub>、然<sub>レ</sub>其<sub>變</sub>有<sub>レ</sub>窮<sub>也</sub>。精<sub>神</sub>者<sub>、</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>同<sub>者</sub>也、然<sub>レ</sub>其<sub>變</sub>無<sub>レ</sub>

窮<sup>マルコト</sup>也。操<sup>リテ</sup>其有<sup>ル</sup>窮<sup>マルコト</sup>者<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>求<sup>メ</sup>變<sup>ヲ</sup>而欲<sup>ス</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>異<sup>ヲ</sup>与<sup>ニ</sup>氣運<sup>ハント</sup>争<sup>ハント</sup>吾以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>能<sup>ク</sup>為<sup>ス</sup>異<sup>ヲ</sup>而終<sup>ツ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>為<sup>ス</sup>高<sup>キヲ</sup>其究<sup>キハミ</sup>途<sup>ヲ</sup>徑<sup>ヲ</sup>窮<sup>マリテ</sup>而異<sup>ナル</sup>者<sup>モ</sup>与<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>俱<sup>ニ</sup>窮<sup>マル</sup>不<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>愈<sup>ス</sup>

勞而愈遠乎。此不求<sup>メ</sup>古人真詩<sup>ノ</sup>之過<sup>チ</sup>也。

(鍾惺「詩歸序」による)

(注) ○昭明——南朝梁代の昭明太子蕭統(五〇一—五三二)。先秦から梁代にいたる時期の詩文を選び、「文選」と題する書物にまとめた。同書所収の古詩十九首は、その後、古詩の模範とされた。

○唐人之古詩——唐代の詩人が古詩にならって作った詩。○慮——「無慮」とおなじ意味。

問(一) 傍線の箇所(a)(b)の訓み方を、送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。現代仮名づかいでよい。

問(二) 傍線の箇所(ア)「如是而已矣」、(イ)「非惟古詩亡」をすべて平仮名で書き下せ。現代仮名づかいでよい。

問(三) 傍線の箇所(シ)「其有窮者」とは何か。本文より抜き出せ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「吾其敢易言選哉」とあるが、なぜ筆者は、「選」ということを安易に言おうとはしなかったのか。その理由を本文の内容に即して四十字以内で記せ。

問(五) 傍線の箇所(エ)「不亦愈勞而愈遠乎」を、本文の内容に即して口語訳せよ。

問(六) 傍線の箇所(オ)に「此不求古人真詩之過也」とあるが、筆者が批判する「古人の真詩を求め」ない態度とはどのようなものか。

「古人の真詩を求め」る態度と対比させながら、本文の内容に即して五十字以内で記せ。